

- 一、侍共之雖爲公事、双方一人宛可罷出候事。
- 一、公事場に出候者、不依誰々刀・脇刺を置可被出事。
- 一、在々田畠并野山之境出入於在之者、近郷之百姓召出相尋、其上明鏡就無之は、檢使を遣可相極候事。

一、喧嘩は公儀可爲如御法度之、家財は當座に押置、隣三間可預置候。後日に理非之輕重遂穿鑿、非分之方迄越度可申付候事。

一、奉公人と町人就商賣之儀、於町中出入有之は、奉公人可爲越度候。但、奉公人達て申分就在之者令穿鑿、理非之隨輕重可申付事。

一、借用仕者之儀、不依奉公人・町人・百姓、如申定可致沙汰。自然如在仕者雖有之、代官・給人無届、理不盡に其身捕置者可爲越度事。

一、夜中に往行之女をとらへ、出入於有之は、理非不立入、其男可爲成敗事。

一、馬賣買之儀、相極上にて三日過候はゞ、如何様之雖爲曲馬、主に返遣儀停止候事。

一、侍不寄地下人。或公事を巧、或證跡無之儀構虚言、公

事場は罷出輩曲事可申付事。
一、公事篇各令裁許、理非相極、書付を出上、重て違篇申輩於有之は、曲事に可申付事。
右條々申分在之輩は、爲公事錢銀子一枚宛可持參候。但、理運之手前は銀子可返進者也。

慶長十八年八月十六日

七九 於御鷹場狩獵停止之儀御定

泉野・こぢら野、付かたまはり御法度之條々

- 一、大鷹・小鷹によらずつかひ候事。
- 一、天あみの事。
- 一、地ごくあみの事。
- 一、つきあみの事。
- 一、しきあみの事。
- 一、わな并千本ぐしの事。
- 一、さし棹の事。

右堅御停止者也。

寛永三年卯月十五日

八〇 代官・給人年貢米等取立之儀御定

覺

一、代官・給人年貢米并諸役等令納所、百姓に請取不遣候儀可爲越度。但、百姓等右之請取を取置、以來不請取旨於申は、代官・給人誓紙上を以百姓可爲曲言。自然書物令紛失ば、其當座可相斷事。

一、諸給人納升、作事場より出候斗升を以、年貢諸役等可納所事。

一、田畠刈取時分に百姓等、或召籠或は追失、作毛上を以給人刈取候は、先郡奉行に相斷可刈之。然者其年の年貢米相當分召置、相殘所は百姓かたへ返可遣候。但、右之百姓於令逃散は郡奉行に届置、其上を以刈取、郡役・借物以下、其村々連判之百姓等立會様子可相極候。何方にも不及届、給人刈取におゐては可爲越度事。

一、諸給人小役召置候事、其所々より、最前相定直段を以、百姓前より銀子にて可召置候事。

一、諸給人免平均帳之儀、毎年目安場の一通、郡奉行に一通可出候。觸渡日跟遅々仕間敷事。

一、給人代官、百姓成敗仕事、目安場は相斷、穿鑿之上を以可申付候。自然當座に至申付候はで不叶儀在之は、後日誓紙を以目安場は可相理事。

一、藏納・給人地相抱百姓之儀、代官・給人は無届遂糺明、書物等いたさせ候儀有之間敷事。

一、代官・給人を訴目安指上百姓、申所非分に相究候は、依科之輕重に可申付事。

一、代官・給人手前、未進方に百姓召仕儀、其年之餘人召置候給米之並に相定、一年切に可召仕候。利息申懸、數年召置候儀仕間敷候。但、過分之未進に相つき候はゞ、郡奉行に理、相談を以年數可相定。自然少分之未進に召仕者之事は、其年々給米積を以下行可遣事。

一、代官・給人知行所百姓、他郷に或は縁邊或養子等に遣候事、最前可申交代官・給人に可相斷。但、何時も三ヶ年以